

成田中学校で教鞭をとる傍ら 執筆活動を続ける 童話童謡雑誌「赤い鳥」を創刊

夏目漱石に傾倒し
創作を始める

平成6年6月26日 成田山公園の一角に「鈴木三重吉文学碑」が建立され、盛大に除幕式が挙行された。

文学碑には『古巣はさびても 小鳥はかよう 昔忘れぬ屋根の下 三重』の句が彫られている。

三重吉は、明治15年（一八八二）9月29日、父悦二、母ふさの三男として広島市猿楽町81番地に生まれた。父悦二は、市役所の学務課に勤務。のち電燈会社に転職した。兄2人と次男の3人は10歳にならないうちに早世した。続いて9歳のとき母も亡くなり、父と祖母に育てられた。そのせいか三重吉はわがままでかんしゃくもち、その上、神経質であったという。

三重吉は明治34年、広島県立第二中学校を卒業。9月、京都の第三高等学



校に入学した。

明治37年（一九〇四）9月、東京帝国大学英文科に入学。当時、英文科講師の夏目漱石がおり、三重吉は漱石の『我輩は猫である』（ホトトギス）『倫敦塔』（帝国文学）を読んで漱石の文才や人柄に傾倒するようになった。

同年6月、胃病と強度の神経衰弱のため、一年間休学し、自宅と瀬戸内海の能美島で静養に入った。この間、三重吉は漱石の知遇を得るようになった。能美島の生活に創作意欲もわき、漱石からの推薦もあって、『千鳥』が39年

鈴木三重吉（すずき みえきち）

広島市に生まれる。夏目漱石の作品に傾倒し、作家を目指す。成田中学に教頭兼英語教師として着任。教鞭をとる傍ら執筆活動が続けるが、思うに任せず2年6カ月で辞職。大正に入り童話作家に転じ、童話童謡雑誌「赤い鳥」を創刊した。

5月「ホトトギス」に掲載された。

この間、祖父の宮助、続いて父悦二が他界した。

父の死によって一家の生計を背負うことになった三重吉は、単身上京した。

成田中学の 教頭兼英語教師に

明治41年（一九〇八）10月、三重吉は紹介を得て成田中学（現在の成田高校）の教頭に着任した。教師としての三重吉は、嫌なクタイにステッキというハ

イカラな風采であったという。

授業は厳格で生徒の学習意欲を高め、生徒の喇叭隊を組織するなど新しい教育法も導入していった。一方、多忙な校務に追われ、創作活動に取り組めない生活には、「何だか書きたくて仕方がない。何故書きたいかということとは分らんが、本当に書きたい。ただ書きたい」という思いを友人の小宮豊隆に書き送ったりした。

42年8月、郷里の生家を売り払って祖母たちを引き取り山之作の一軒家に居を構えた。11月、後に文学者として名をなす青木健作が赴任。

43年、高浜虚子の依頼で長編小説を引き受け、『小鳥の巣』を執筆した。

しかし、執筆が思うにまかせず、辞職をも考えるが、校主である石川照勤大僧正の慰留で、休職をしながら作家活動が続けることができた。この冒頭の温情に対して三重吉は、自著『作家として世に立つまで』の中に次のよう



童話童謡雑誌「赤い鳥」

に書いている。

「私はまだ『千鳥』以下数編の小さい作しか書いていなかった時代ですから、あれだけの大作のためには、10力月の間、それこそ血の出るような苦痛に悩まされておりました(略はじめの12、3回を勝浦の宿屋で書き、その次は成田の住宅で書き続け、5月ごろから祖母たち2人を引き連れて、成田から半里ばかりの或不自由な村へ引っ込んで、しばらくそこでこつこつ書いて行きました。終に近い10数回は、夏目先生の御病氣のために修善寺へ行つて温泉宿で書き、9月からは再び学校へ出ながら、終の20回ばかりを書き終えました。或るときには、近所が騒々しいので、成田図書館の好意で同館の二階で書かせて貰ったこともありました。

ときどき授業を終へてから、みんな引き上げた教員室に一人残つて、夜の12時近くまで書いて、それからてくてく遠い村まで寝に帰ったこともありま

5年生が先頭に立ち ストライキに突入

こうした作家としての苦悩とは別に教師としての三重吉には予測しがたい出来事が起こった。

明治44年4月、三重吉29歳のとき、成田中学伝統のストライキが起こった。このストライキは三重吉が5年生の英語の試験で何人かに0点をつけたのが発端であったが、三重吉に対する同僚教師の反発やしつとも加わったものと



成田山公園に建てられた「鈴木三重吉文学碑」

いわれている。学校は5年生が先頭に立ち同盟休校に突入した。事の重大さを知った三重吉はこの一件で成田を去る決意を固め、創作活動に専念することになった。三重吉の成田時代は短かったが、三重吉が生徒に与えた感化は大きいものがあった。

教えるの中には、農家の跡取りから三重吉宅の玄關番になりたいという文学志望者も現れたりした。

特に三重吉が常日ごろ生徒に言っていた「詞を愛せ、文字を大切にし給え」という教訓は、今でも成田の教え子たちに強い印象をもって残されている。

長女すずの誕生から 童話の世界へ

明治44年5月、日比谷の海城中学校(現在の海城高校)に勤務し、大正7年まで在職。その傍ら作家として立つ決心を固めて創作に専念。同5月下旬、ふじと結婚。大正2年4月からは中央大学講師も兼ねた。

大正4年7月、妻ふじが腸チフスで他界。その後、河上らと結婚。長女すずが生まれた。すずの誕生は、三重吉にとってこの上ない喜びとなった。そうした子どもへの愛情から本當の童話を書きたいという思いがつのり三重吉の童話研究が始まった。

大正5年12月に最初の童話集『湖水の女』が上梓された。雑誌では「婦人公論」に「長鼻物語」「嘘の王妃」など数編のおとぎばなしを載せ、同年4月世界童話の翻訳である『世界童話集』第一編『黄金鳥』を刊行し以後15年8月まで21編が出版された。大正7年1

月、長男瑞吉が生まれる。

童話の世界に没頭した三重吉は、児童雑誌創刊を目指した。

大正7年7月、童話雑誌の児童雑誌「赤い鳥」を創刊。北原白秋・芥川龍之介・島崎藤村・泉鏡花・徳田秋声等多数の著名な作家の寄稿も得た。

このころ、夫人が二児を残して実家へ戻ってしまったため、育児と編集との苦闘の日々が続いたが、やがて10年10月、はま子と結婚。はま子は三重吉と生涯を共にすることとなる。

昭和3年5月、乗馬による心身の鍛錬を目標とする日本騎道少年団を設立。ここにも三重吉の青少年の未来にかけ

る夢があった。

10年8月、山梨県小淵沢に一家を挙げて移り、その地で『綴方読本』を起稿し、「赤い鳥」収載の綴方の中から傑作を選び、9月帰京後に選評と指導論とを加えた。10月、ぜんそくの発作が起こり臥床したが、病を押して『綴方読本』を出版した。

しかし、食欲も減退し、病状も悪化して11年6月27日、東京大学病院真鍋内科で53歳の生涯を閉じた。

「赤い鳥」、「綴方読本」はこのときをもって終刊となった。三重吉の日本文学界での功績と成田での交流を記念して前記の石碑が建てられたのである。

(文中敬称略)